

第 15 講 音楽はなぜ学校に必要か～未来を生きる世代に必要なこと

【学習到達目標】

- ・ 学校における音楽科教育の意味と役割を説明できる。
- ・ 未来を生きる世代に必要な音楽の意義と価値について、自分の考え方を反映させて授業デザインできる。

1. 音楽の起源

音楽「ミュージック (Music)」の語源は古代ギリシャの「ムーシケー (mousike)」とされ、詩・音楽・舞踊を指し、音楽の起源とされている。アリストテレス (Aristoteles) は、音楽は、遊戯や休養、徳の涵養、高尚な楽しみにおいて有用であると論じ、徳の涵養が教育の目的として最も重要であるとした。

紀元前のローマ帝国では、算術・幾何学・天文学・音楽の4つの科学的学問（数学）に文法学・論理学（弁証法）・修辞学の3つの人文学分野が取り入れられ、科学的学問（数学）に統合した「自由七科」となり、ギリシャで発展した学問が引き継がれ、リベラルアーツ (artes liberales) が形づくられていった。

古代中国の孔子は、教育は、詩（詩経）に始まり、礼（典礼）を学び、最後に音楽を学ぶことによって完成すると述べた。これら、古代社会における哲学は、その後の歴史に大きな影響を与えた。音楽の学びの意義に関わる原点である。

2. 学校教育における音楽科の果たす役割

学校における音楽の学びの意義を議論するには、人間にとって音楽とは何かという根源的な問いからの議論が必要となる。マーセル (J.L.Mursell 1967) は、「音楽教育と人間形成」の中で、

○音楽は、人間生活に役立ってこそ、教育に取り入れる価値がある。私たちが、より幸福に、より完全に生きるために役立つものでなければ、教育的価値や意味があるとは考えられない。

○ものを学ぶのは、私たちが、より豊かに生きより善良なより温かい心の人間になるためである。人間の教育は、それを学ぶ人たちが、よりよい生き方ができるようになったとき、はじめて、それを学んだ価値があったといえる。学問は、生活の手段

として役立ってこそ、価値がある。音楽は、わたしたちの人生をよりよいものにするために、存在する。

○人間的価値に基づく音楽性は、豊かな教養のある音楽性である。音楽は、人間の心が生み出したものであり、人間の心を表現したものであることから、民族文化・音楽の重要な一面として、社会的にも大きな意義がある。音楽は、すべての人がともに幸福になれる社会形態を生み出す芸術である。

と、語っている。マーセルは、もともと音楽は、他の手段では不可能な感情経験の機会を提供するもので、学校教育における音楽の立場を強固にする最善の方法は、音楽を人間にとって意義あるものにするることであると述べている。全ての感覚媒体の中で、音が一番、感情と深い関係をもっており、音楽芸術の本質は、最も純粹に感情的なものである。音楽はその感情的な力で人の心に強く訴えかけ、また人間生活の原動力となり得る。音楽を通じて行われる教育は、つまり偉大な人間の感情に触れることができる、と説明した。

リーマー（B.Reimer 1987）は、音楽教育の必要性の論拠として、人々の感覚や感情を音楽で経験できること、独自性の論拠として、それは他教科にはできないこと、を挙げている。音楽に内在する感情喚起的な働きを美的に感じ取るためには、体系的なカリキュラムで理解力をつけていくことができる、としている。

音楽科は、人間ならではの感性や創造性を育むことができる教科である。学習の生活化を図る音楽によって、子供は感性を働かせ、音楽や文化によって、よりよい社会や未来を創っていくことを学んでいく。教科を学ぶ意義とは、何故その教科を学ぶのか、学んだことがやがて自分の人生、キャリア形成や社会づくりにどのように貢献していくのか、ということである。音楽教育に携わる教師自身には、音楽の価値と意義をふまえて、子供を音楽的に引っぱっていきけるだけの社会的指導性をもち、新しい時代を創造しリードしていく使命がある。創造性を育む教科を教える教員の創造性が試される。

3. 変わりゆく社会のニーズへの対応

予測困難な時代において、未来を真に豊かで幸せなものにするためには、AI にはできない人間ならではの感性や創造性が基盤になるものと考ええる。そのように考えると、人々の暮らしや社会を幸せにするイノベーションを支えるものは感性や創造性がカギとなってくる。

感性や創造性は、音楽のみならず、あらゆる職業において、無限の可能性を発揮する。ゆえに、感性や創造性を育むことができる音楽教育が果たす社会的責任は大きいといえる。近年では、音楽教育の意義や価値に気付いた人々が、科学と芸術、理解と文系といった異分野、異領域の接近や融合、調和を加速させ、新しく独創的なものや

システム・文化をうみだしていくようになった。以下、融合・調和の例を示す。

(1) STEAM 教育

理数教育の STEM 領域（科学、技術、工学、数学）に創造性教育（芸術・リベラルアーツ）を加えた教育理念で、知る（探究）とつくる（創造）のサイクルを生み出す分野横断的な学びを指す。異なる分野の関連性を理解することで、多角的に物事を見る力を育むことを目指している。



図1 STEAM とは (STEAM JAPAN)

中央教育審議会答申（令和3年）では、STEAM 教育の目的には、人材育成の側面と、STEAM を構成する各分野が複雑に関係する現代社会に生きる市民の育成の側面があるとし、各教科等の知識・技能等を活用することを通じた問題解決を行うものであることから、課題の選択や進め方によっては生徒の強力な学び動機付けにもなる、と説明している。STEAM 教育を推進する上では、多様な生徒の実態を踏まえる必要があることから、STEAM の各分野が複雑に関係する現代社会に生きる市民として必要となる資質・能力の育成を志向する STEAM 教育の側面に着目し、STEAM の A の範囲を芸術、文化のみならず、生活、経済、法律、政治、倫理等を含めた広い範囲 (Liberal Arts) で定義し、各教科等での学習を実社会での問題発見・解決に生かしていくための教科等横断的な学習を推進することが重要である、としている。また、STEAM 教育は「社会に開かれた教育課程」の理念の下、産業界等と連携し、各教科等での学習を実社会での問題発見・解決に生かしていく高度な内容となるものであることから、小学校、中学校においても、児童生徒の学習の状況によっては教科等横断的な学習の中で STEAM 教育に取り組むことも考えられる。その際、発達の段階に応じて、児童生徒の興味・関心等を生かし、教師が一人一人に応じた学習活動を課すことで、児童生徒自身が主体的に学習テーマや探究方法等を設定することが重要である、と示している。

(2) 経済産業省「未来の教室」



「STEAM 教育等の教科等横断的な学習の推進について」(R3)文部科学省



「GIGA スクール構想」の上で描く「未来の教室」の姿（R2）経済産業省



「未来の教室」を創ろう 経済産業省

未来を見通しにくい時代において、未来を創る当事者の育成を目指している。改革の柱として、「学びの STEAM 化」で、文理を問わず教科知識や専門知識を習得し、探究・プロジェクト学習（Project-based learning：PBL）で、創造的・論理的に思考し、未知の課題やその解決策を見出すこと、「学びの自律化・個別最適化」を目指すこと教師自身が未来を創る当事者になること（研修プログラム、産業界、民間、研究機関、地域社会と学校教育との行動・融合のためのハードルを下げる、シームレスな学校づくり）などが示された。経済産業省では、新たな学びの実現に向けて、教育と社会の連携モデルをさらに拡充し、次世代を担う人材育成と地域の活性化を推進している。



図2 「未来の教室」web サイト

（3）マサチューセッツ工科大学 MIT 音楽の授業～「創造する力」の伸ばし方～

全米屈指のエリート校マサチューセッツ工科大学は、約 1 万人の学部生と大学院生、約 2 千名の教授・教員を擁し、そのうち 90 名以上のノーベル賞受賞者を輩出している。本大学は、科学、テクノロジー、工学、数学、いわゆる STEM とあわせて、人文学や芸術科目にも力を入れてきた。技術革新が進むほど、誰の何のための技術なのか、人間理解を深める必要性からはじめた文化的教養を身につけさせるための取り組みで、人文学、芸術、社会科学の科目が、現在卒業単位の 25%を占めている。個をいかしながら全体とどう調和していくか、より大きな全体を創造していくには、また、過去を検証し現在を理解し未来の方向性を考えるにはなど、コンピュータによって解決できないテクノロジーに関する倫理教育や哲学の問題は、人間による解決が基本となる。音楽には、人間の創造力に触れあらゆる感情と向き合い、それらを理解し表現しまた自らつくり出すことができる学びがある。音楽は自分を知り、人を知り、世界を知ることができる。MIT では、科学技術だけ優先するのではなく、バランスのよい人間性を育んでいる。

（4）リベラル・アーツ

中世から近世における基礎学問として定着した当時の自由七科が、現代のリベラル・アーツの起源となっている。この自由七科による高等教育は、近代頃にはアメリカやアジアにも広まり、世界的な教養基準として注目されるようになった。日本でも、加速するグローバル化への対応や、イノベーションを積極的に生み出すためのリベラル・アーツへの関心が高まっており、リベラル・アーツが学べる大学も増えてきた。

世の中の仕組みが複雑になると同時に、社会やビジネスで発生する課題も、あらゆる要因が交錯して困難を極めるようになってきており、幅広い教養を身につけることで、広い知見や視野が培われ、柔軟な発想力や思考力で、総合的な判断を下すことができるようになる。専門をひとつに絞るのではなく、複数の領域を学び融合させることで、実社会の複雑な問題にさまざまな角度から立ち向かう総合力を育てることができる。幅広い教養は、人間の精神性を高めていくために大切なものであるととらえ、技術革新が進むほど、人間理解が求められる。

4. 音楽科教育が目指すもの

初等科教育法では、15 講にわたって、インストラクショナルデザインによる教育デザイン研究を行ってきた。インストラクショナルデザインは、創造的な思考を促す環境によって促進される。インストラクショナルデザインで、学びのプロセスに従って組み立てる授業（小規模・短期間）を積み重ね、「音楽の活動は深くて楽しい」「もっと学びたい」と思って終える授業を積み重ねるとともに、人の成長を支援する長期の学びを促進するためのダイナミックな年間指導計画（大規模・長期）を構想してきた。学習科学の立場で言えば、文化を継承しつつ共有し、さらに創造へとつながる「知識創造モデル」に基づく新しい授業観でデザインを進めてきた。

音楽科を担当する私たちが、どのくらいどのような創造的な思考をするか、そして、他者が創造性を表現することをどのように奨励するかによって、音楽科教育は変わる。ハーモニーの美しさを求める合唱は、集団を巻き込んだ創造的な活動である。集団の中の個の歌声の変容や役割や集団としての音楽性の高まりと音楽の息吹を、言葉だけでなく音楽の力によって表現し、音楽性や音楽的思考、音楽的リテラシーの資質・能力の向上を目指せば、意味のある質の高い音楽活動を実現でき、個に応じた細やかなステップの積み重ねで、よりよい深い音楽性の探究ができる。豊かな音楽性に支えられた音楽は感動を与え、そこから新たな音楽美の創造が始まる。

学校教育の音楽科の役割は、音楽科における学びの本質である音楽の感性（音楽的感受性、音や音楽の美しさなどを感じ取る時の心の働き）を育み、音楽で人とのつながりを築き、人間にとっての音楽の意味や価値を子供と共に考えることである。音楽の授業において取り上げられる教材の多くが、日本をはじめ諸外国の文化的・社会的背景を豊かにもつことをふまえると、教材に内在する文化的・社会的意味の広がり

と多様性も可能性としてもつ。

音楽科は、規定された情報の伝達がなくとも、音や音楽で一致できるコミュニケーションができる教科である。音楽の勉強は、それが純粋な感情経験となるにしたがつて、教育的価値が増す。マーセル (J.L.Mursell、1967) は、教育における音楽の価値とポイントとして、歌うとき、歌の情緒と魅力、つまり芸術的感動を非常に身近に感じる。子供の歌は、感情の表現と開放を第一にする。選曲に当たっては、歌の感情的価値と誠実性に重点を置くようにする。真実な感情にあふれた音楽を歌うことには、技術的障害が少ない。楽器の演奏においても、歌いたい気持ちがまず養われるべきで、歌うことが自然に感情表現の基礎になる。創作では、音で感情を表現する体験を仕込むこと。音楽の感情的価値を強調し、子供が何か伝えたいことがあってそれを音楽で表したいという衝動を感じてつくること。鑑賞では、音楽を人に紹介することはいわば芸術的な仕事であるにとらえ、初歩の段階では、音楽の知識や音楽様式に関する専門的な事柄に重点を置くことは注意して避け、作曲家・作曲年代、場所、その他音楽についてのエピソードなどは、音楽を理解しその感情を感得する助けとして学ぶべきで、知識のための知識であってはならない。人間が安定した感情をもち、幸福な生活ができるようになるには、子供の時から知的経験に匹敵するだけの感情経験の機会を与えることが大切で、この感情経験の機会を最も多く提供するものが音楽である、と述べている。他教科や領域では実現できない音楽科のよさと音楽の価値を、教師自身が理解しておきたい。

インストラクショナルデザインは、理論の構築と実践的なイノベーションの両方を同時に追究することが主張の根拠となり、デザインプロセスの目的のためのツールやアプローチの開発と改良で、さらなる授業改善につながる。新たな知の創造に、音楽科を指導する教員自身が加わり、それが、デザイン研究の理論的及び実践的な成果として定着し、音楽の本質をふまえつつ時代のニーズに応じて活用できるものに高めていく。

私たちは、これまで以上に「今行っている音楽活動や音楽の学びが、子供自身の生活や社会、今後の人生とどのように結び付いていくのか」「そのために子供が音楽と主体的に関わり、音楽だからこそ育成できる創造力をどのように育てていったらよいのか」、という視点を意識して、音楽科の教育活動を展開していきたい。

【参考文献】

- 1) マーセル J.L.Mursell (1967)「音楽教育と人間形成」(音楽之友社)
- 2) 日本音楽教育学会 (2019)「音楽教育研究ハンドブック」(音楽之友社)
- 3) 菅野恵理子 (2020)「MIT マサチューセッツ工科大学 音楽の授業～世界最高峰の「創造する力」の伸ばし方」(あさ出版)
- 4) 今川恭子 (2020)「わたしたちに音楽がある理由【音楽性の学際的探究】」(音楽之友社)
- 5) 小路明善(2024)「全世代型教育システムの構築」週刊 経団連タイムス No.3622
https://www.keidanren.or.jp/journal/times/2024/0125_05.html (日本経済団体連合会)

課題

1. 音楽を学校教育で学ぶ意味を、子供にわかる言葉で説明しなさい。

「先生、なぜ音楽を学校でみんなが勉強するの？」